

壠都創刊日本語辭書

吉町，義雄

<https://doi.org/10.15017/2556549>

出版情報：文學研究. 33, pp.99-110, 1943-12-30. 九州文學會
バージョン：
権利関係：



奥都創刊日本語辭書

吉 町 義 雄

August Pfizmaier は奥國 Kaulsbach に一八〇八年三月十六日に生れ、首都維納附近の Döbling で一八八七年五月十八日に歿した東洋學者である。元來料理人であつたが Prag で法學を修め、更に醫學を學んで一八三八年以來は醫者として維納で生活した。傍ら該博な言語知識を獲得して約百八十箇の學術論著を大部分は一八五一年から八八年へ掛けての維納科學學士院刊行物に發表してをり、一八七八年には學士院會員となつた。土耳其語、日本語、愛奴語、綠島語の文典辭書、特に支那と日本の歴史や文學からの翻譯に寄與してゐるが、その價值は不得策な表題と奇抜な用語とによつて害されてゐる。(1)

彼が支那學に於ける業績は今論ぜぬが、日本學に占める地位なるものを觀るに、交通不便な十九世紀中葉に遼東最難解な日本語習得の精進は結果の未熟を覆うて餘あるものがあり、一方に獨の十數年先輩の Siebold や數歳年長の Hoffmann と鼎立し、他方に佛の一世代若輩 Rosny と輸贏を争つて華なものである。論著も殆ど全部昔から本邦へも將來されてゐて、吾人の印象感銘が濃い。(2)

史學上の勞作は省いても、彼地最初の愛奴語文法を公刊せる、(3) 琉球語新譯聖書上梓に參與せる、(4) 日本文學翻

譯には嚆矢、少くとも先鞭の榮譽にあるは固より、^⑤ 日本語學に於ける研鑽も既に先學によつて詳細紹介されてゐて、^⑥ 此處へ冗筆を繰返す迄もない次第である。

自分が今敢て驥尾に附して解題しようとするのは、一八五一（嘉永四）年に彼が四十三歳時（丁度筆者と同年）維納で出版された日本語辭書である。初冊だけで中絶した上に内容も決して上出来とは言へまいし、^⑦ の又先蹤も規模の刊行日本言葉集^⑧ や骨董的の稿本日獨辭書^⑨ なら既存するが、兎も角刊行大計畫辭書としては廣く碧眼系重要な地位を占める事は尊重記憶しなければならぬ。

本書は四折版（縦三二糎、横二五糎）であつて扉をして序文計十二頁分の次に本文八十頁が存する。^⑩ 使用羅馬字は凡て Antiqua 體を以てしてあり、彼地製作の漢字片假名は本文部のみに見られる。

先づ扉には（以下）「符は改行箇所を示す）」

Wörterbuch] der] japanischen Sprache.] Von] August Pjizmaier.] Erste Lieferung.]

WIEN.] In Commission bei Carl Gerold und Sohn.] Gedruckt bei den P. P. Mechturisten.]
1851.

と十行に互つて立斜體で印刷されてある。裏は白紙。

序文は羅馬數字「乃至Ⅹ」の頁付があり、Vorrede] zur ersten Lieferung. と題して始に本書作製に引用參酌した辭書類の内容價值を檢討してゐる。

2. による。
1. Wa-kan-won-seki sio-gen-zi-ko 【和漢音釋書言字考】は Siebold の石版 Thesaurus linguae japonicae

2. Zi-rin-gioku-ben 【辭林玉篇】

3. Faya-biki-set-yô-siu 【早引節用集】

4. Nieuw-verzameld Japansch en Hollandsch woordenboek. Jedo 1810 【蘭語譯撰、文化七年】は中津
〔Nakats (Naka-tsu)〕【奥平昌高】侯により上梓されたもの。

5. Nederduitse taal. 通詞用のもので刊行場所年時無記の殆ど支那語釋の蘭語辭書。

右に於ては書言字考が最重要なるを論證し、外に

Fr. Didaco Collado : Thesauri linguae japonicae. Romae 1632.

をも利用したと斷つてゐる。

次に所收語彙に關しては純粹固有日語の外に漢語との混用語句の存すること、複合語や熟語の性質についての説明、そして日本語辭書には音韻順と物類順とによる種類があるが本書は音韻式の伊呂波〔I-ro-fa〕に従つたこと、地名人名は書言字考や早引から、博物類は中津辭書から採つたとしてある。

假名遣〔Ka-na-dzukai〕に就ては、*febi*(蛇)*fenu*とする様な方言差異は認めない、そして語間や語尾では *Fu*, *Fo*, *Fe*, *Fu*, *Fi* が *vua*, *vuo*, *ye*, *u*, *i* に變ずること、稀に *zi* の代りに *dzi* が、*dsu* の代りに *zu* が又は *zu* の代りに *dsu* が存すること、漢語に於ては種々の音韻變化あること、その他の變化は綴方〔orthographisch〕でなく方言〔dialekt-〕

isch)であるを説明してゐる。

所でX頁には

自分は日本語を羅馬字で書替へるに當つて、Colladoの著作に含まれるのと同様、そして特に長崎で行はれる發音とは頗る異なる一般的支配的方言に従ふ發音を基礎とした〔Bei der Transcription der japanischen Wörter mit lateinischen Lettern habe ich die Aussprache nach dem allgemeinen herrschenden Dialekte, wie dieselbe in dem Werke Collado's enthalten ist, und die namentlich von der in Naga-saki üblichen Aussprache sehr bedeutend abweicht, zur Grunde gelegt.〕

とあるのは摘出して置く必要がある。

次に動詞は Rodriguez が第一活用〔Conjugation〕(元來種〔Classe〕)としたものや是等と間違へられ得るものは本來形に従つて語根を示したこと、形容詞活用に就ては口語では音便を取るが語根が常に *st* で終るものは第二類〔Gattung〕に屬し、是に第一類のものと同様に語尾 *st* が添附して *utsukusi-si* 又は *utsukusi-i* となると説明してゐる。

次に本文に於ける漢字片假名部と羅馬字部との組方體裁に言及し、最後に維納帝國科學學士院の援助を感謝して

WIEN, den 18. Jänner 1851. Der Verfasser.

と二行に結んでゐる。

序文最後頁裏側(XIIに當るが頁付無し)には略符説明〔Erklärung der Abkürzungen〕を題して下に十三行あり、

j. (日本起源語)、ch. (支那起源語)、obs. (廢語)、rad. (動詞語根)とした外に、序文に見える辭書名七箇が記され、同頁下側には訂正「Verbesserungen」が三行刷込んである。

本文は開いた左右兩面が對照同一頁となる體裁であつて、即ち左右頁同一の算用數字頁付が上方に印刷され(但し上方少し空白ある第一頁だけ向つて右は頁付無記で、又向つて左の前裏は白紙)、而も各頁は中央縦線によつて二欄宛に分れてゐる。そして奇數頁は向つて左側に、偶數頁は右側に算用數字番號を附した縦書漢字語句(右側に片假名で讀方を添へた)十數箇宛が刷られてある。(ii)次に奇數頁は向つて右側に、偶數頁は左側に多くは四十餘行に互る羅馬字文が印されてあるのである。各語句に附された算用數字番號はそれ／＼交互反對頁のものと呼應して閱覽に便してある。羅馬字部に於ては日本語とその獨譯の後へ間々用例が同じく日獨語(此の方の日語は斜體)もて補はれた上に、最後に横線に續いて必ず英譯が斜體で添へてある。今開卷劈頭例を示せば左頁

1. 井

に呼應して右頁は

1. I, j. Ein Brunnen. Gewöhnlich nur in] Zusammensetzungen. Sonst *ido*, *ino soko*] und *ino moto*.

— A well.

と對照される。

右の様な體裁で印刷されてゐるのは79頁迄であつて、最後例は1034の縦書 一冊 〃 ITTAL, ch. 云々である。

そして最終偶數頁たる 80 (實質上第百六十) 頁は羅馬字部しかない譯であつて、最後例は

1046. ITTAN, ch. Eine kurze Zeit, eine Weile.] *Ittan teki-wo / azamuku usi. Eine Weile.] den*

Feind während er betrübt. Neueres.] Lied. — A short space of time, a little while.

となつて、以下餘白もなく中絶してゐる。

本書日本語に使用の羅馬字は、波行は凡て F、良行は R、也行は Y、和行は W を以てしてゐる外には、si(シ)、tsi(チ)、tsu(ツ)を用い、又拗音は zio(丈)、yeo(葉)等の一斑を示せば充分であらう。

祝縁を機として本書未完成交響樂を解説するのは、⁽¹²⁾ 前書の如く歐人彼地刊行同種物(文典類を意味しない)に於て、廿年前の英と數年後の佛露とに介在して廣くは紅毛系、狭くは獨逸系の草分の地位にある點を國語學上、否、本邦獨逸語文學界に強調しようと云ふ微意に外ならない。⁽¹³⁾

註 1 Meyers Lexikon 及び Der Grosse Brockhaus によらる。

2 維納科學學士院報告 [Sitzungsberichte der philosophisch-historischen Classe der Kaiserlichen Academie] は一八四八年創刊號から九大圖書館に存する。

市河三喜博士文庫目錄 [Catalogue of the Library of Sanki Ichikawa. Part I. English and Comparative Philology. Tokyo. 1924] 178—82 頁には同上報告抜刷共計百三十八點が算へられ、本稿解題辭書も見えろ [XV. Orientalia. p. 179]。

3 金田一京助博士「蝦夷語學鼻祖上原熊次郎先生逸事」新村出博士「附記」(大正二年八月『藝文』第四年第八號、同十四年

二月初版『アイヌの研究』所收)

4

奥平武彦教授「明治六年維新版邦譯路加傳福音書に就て」(昭和三年一月『^{新書}明治文化研究』第四卷第一冊)

重久篤太郎氏「海外及琉球に於ける聖書の邦譯」(昭和九年一月『同志社高商論叢』第九輯、同十六年十月初版『日本近世

英學史』所收)

豐田實博士「基督教聖書和譯の歴史」(昭和十年七月『文學研究』第十二輯、同十四年二月第一刷『日本英學史の研究』所收)

5

饗庭與三郎(篁村)「種彦が作の蘭譯につきて」(明治二十七年十一月『早稲田文學』第七十五號、同四十二年四月『雀をどり』坪内雄藏(逍遙)博士・水谷弓彦(不倒)『列傳體小説史』同三十年五月下卷所收)はさまでの名作とも聞えざる『浮世形六枚屏風』の所謂蘭譯は漢譯なるを考證してゐる。因に『續々帝國文庫』明治卅五年八月『柳亭種彦短編傑作集』緒言に「元來種彦の傑作は艸雙紙に頗る多し、中にも浮世形六枚屏風は傑作中の傑作にして西洋各國にも此作を賞讃し既に蘭譯英譯に成て世に名高し」とあるを書添へてをく。

石川巖氏「松岡梅彦繖刻『浮世形六枚屏風』に就て」(昭和四年六月『書物の趣味』第四冊)篁村説を引用して英譯本等を寫眞入解説。

新村田博士「柳亭種彦が浮世形六枚屏風の歐譯」(昭和五年一月『佛教文學』第三號)漢英佛伊譯の論證。

龜田次郎教授「浮世形六枚屏風の漢譯本」(昭和五年十二月『書物の趣味』第六冊)獨譯本の扉や内容の寫眞がある。因に同教授「浮世形六枚屏風の佛譯本」(同七年三月同誌第七冊)寫眞入が存する。

小牧健夫教授「フィッツマイエルの日本文學譯本」(昭和七年五月『文藝春秋』第拾年第五號、同十七年九月『影ぼふし』大

草實氏『讀書隨筆』昭和十三年三月所收)彼の誤譯振の例證が見られる。

新村出博士「萬葉集の歐譯」(大正十年十一月『心の花』第二十五卷第十一號、同十四年九月初版『典籍叢談』昭和十八年五月『朝霞隨筆』所收) および「海外の萬葉研究」(昭和八年四月『萬葉集講座』第二卷、同九年三月『典籍散語』所收) 菊澤季生氏「ローマ字書の大和歌」(大正十四年七月『ローマ字世界』第十五卷第七號) および昭和六年六月『國字問題の研究』118頁寫眞

6 新村出博士「歐洲に傳はつた和訓葉」(明治四十四年二月『教育學術界』第二十二卷第五號、『典籍叢談』所收)

武蔵長藏博士「ドクトル ホフマンの舊藏及び二三の彼の著書」(昭和三年五月『書物の趣味』第二冊)一八五九年維納學士院報告第三十卷に於て Prizmaier が掲げた露都創刊日露辭書批評論の別刷表紙の寫眞がある。

7
新村出博士「歐洲に傳はつた和訓栞」雜誌六八頁下、所收本六六—七頁「又既刊の部を見ても、其出來榮は甚拙劣なのである。〔中略〕常に勢陽大辭典と殆ど無關係であるばかりでなく、其價值も至て少いのである。」

龜田次郎教授『Hoffmann の日本文典』(昭和二年十二月『書物の趣味』第二冊)二二頁「今日より見れば何れも我語學書」としては左したるものではないのである。」

8 吉町義雄「歐人刊行日本言葉集覺書」(上)(中)(下)(昭和十五年五月、十一月、同十六年四月「言語研究」第五、六、七・八號)

6 Johann Christoph Adelung, *Mythridates oder allgemeine Sprachenkunde*. Berlin. Erster Theil. 1806. S. 571 2
Engelb. Kämpfers Japanisches Wörterbuch befindet sich handschriftlich in dem Britischen Museum zu
 London. 巻六の 回書 Vierter Theil. 1817. S. 256 には前掲稿本辭書の表題は *A Vocabulary Japanese and high*
German; the Japanese words being expressed in latin characters なる事が補足されてゐる。

10 I. Goškevič, *Japonsko-russkij slovar'*, Sanktpeterburg 1857 (橘耕齋『和魯通言比考』)の序文X頁には一八五一年から今迄に全辭書の三十分の一以上にならぬ一冊しか出でゐなう [no s 1851 goda do six por vyšia tol'ko odna tetrať, sostavljajačaja ne boľše 1/30 doli vsego slovarja] と見える。

Pagès, *Bibliographie japonaise*. Paris. MDCCLXIX. 597 の *Wörterbuch der japanischen Sprache*. Part I. Vienna, 1851, royal 4°, pp. 92. 1^{re} livraison, seule publiée. の頁數は誤解され易う。

11 片假名だけのものは五箇所ある。即ち1頁に 14. イ、15. イ、2頁に 20. イ、23. イ、ヤ、69 頁に 890. イタテイ。最初のものは廢語此ノ君イの如きもの、後四は間投詞。

12 Wenckstern, *A Bibliography of the Japanese Empire*. Leiden. 1895. p. 78 12 *Wörterbuch der japanischen Sprache* 1st part cont I-Itan of the "I-ro-ha" alphabet [all published] XI and 80 double pp., imp. 4°, Wien, 1851. (see Pagès, *Bibliographie jap.* N° 597). For each of the 1034 words enumerated is given the Chinese sign, the sound in Kata-kana and Roman characters, German and English translation, Japanese synonyms etc. は正鵠を失してゐない解題である。

扉(朱印消して)と本文61(華年に因んで)頁の挿入寫眞は最近九大圖書館が一束約壹萬圓で購入した長沼賢海教授舊藏の日本關係洋古書中にあるものから撮つたのである。長沼本は假綴薄表紙を除いた扉以下本文八十頁の後へ直に、同じく扉以下の同大 *Der Almanach der klein bambusfarbigen Schalen*. Ein Beitrag zur Kenntniss der Mundart von Jedo. Wien. 1868. 70 S. 及び *Erklärungen zu den Nachrichten von der Ankunft Fiko-fo-no ni-ni-gi-no mikoto's in Japan*. Wien. 1867. 98 S. を合綴製本した表紙背皮上方へ黃色地帯に金文字で *PEIZMAIER / VOCABULAIRE*

／ MÉLANGES と三行に刻してある。

13 今純紅毛系には觸れない立場に於ても、普墮人日語研究史と本邦人獨語研究史とは扱方も異なる譯であるが、兩者交流して完璧を望まれる筈である。老婆心から左記文獻を附記抄出して置く。

安藤正次教授「國語學上に於ける歐米人の貢獻」第三回（明治四十年九月『國學院雜誌』第拾卷第九）第三章「第二期に於ける歐米人の日本語研究」一五頁「併し當時に於ては、英人は、猶、未、深く日本語研究に歩を進むるに至らなかつたので其の主なる研究者は、猶和蘭及佛蘭西であつた。獨逸の如きは、當時、殆、全く、此の圏外にあつたのである。」

上田萬年博士「獨逸語の未來」（大正十三年四月『太陽』第三十卷第四號）歐洲大戰後の獨語凋落と佛語中心を警告して「三八頁下「私は日本人に取つて最も必要な外國語は此の英語であつて、次いでは支那語、露西亞語の研究を更に十分に行ふ事を主張する。少しく過言かも知れないが、獨逸語の如きは専門家の研究するものとして別に置いて宜いものであると信ずる。何となれば之までの獨逸語は第二の希臘語の如きものである。死したる言語に等しいものである。で今日以後の獨逸語は恰も新希臘語の如き立場に立つものと稱して差支へないものと思ふ。」

荒本幸太郎氏『文明輸入に關する古書展覧會目錄 於大阪毎日新聞社」大正十四年九月の a. 語學に關するもの 四獨逸語五六頁「語學の中で最も後れて開けたのは獨逸語である」

石本岩根教授「明治年間に於ける獨和及和獨辭書に就て」（昭和八年六月『愛書』第一輯、同九年八月第二輯）拾遺完成を希望する。

井上哲次郎博士「日本に於ける獨逸語研究の起原及び其の發展」（日獨文化協會パンフレット昭和九年九月）や殊に

山岸光宣博士「獨逸語學搖籃期のことども」（昭和十年四月『文藝春秋』第拾參年第四號）および「日本に於ける獨逸語研

究の沿革」(帝國學士院『學術研究獎勵資金及事業便覧』昭和十二年四月)へは次の記事を補ふと面白い。

今村明恒博士「わが祖先を語る」(昭和十二年十月『キング』第十三卷第十二號) 306頁「五世の祖は、蘭語だけの知識で獨文を譯したことがあるが、これが我邦に於ける獨文和譯の始であつた。六世の祖今村市兵衛は同じく新井白石にイタリヤ語の通譯をし、吉宗將軍の命を受けて藥書を譯した。これが即ち洋書翻譯の嚆矢。實に享保年間のことである。」

山岸光宣博士「日本に於ける獨逸語研究の沿革」(昭和十四年十一月『獨逸文學』第三年第三輯) 〇頁「(上略) 理學博士今村明恒氏が立ちあがつて、今話のあつた始めて『明和八年』獨逸語を誤魔化し讀みした今村源右衛門こそは我が五世の祖であるといはれた時には、私の驚いたのは勿論のこと、並みある我が國の碩學を網羅した同院會員諸氏も一同どつと哄笑された。」2頁「獨逸語の學習は斯くの如く早く試みられたにも係らず、その後普及を見るに至らなかつたのは不思議である。それは恐らく、露西亞語や英語の如く、外交上の必要に迫られることなく、主として學者の書齋内に限られたためであらうと思ふ。」

同博士「大學南校文書の獨逸學關係事項」(昭和十四年五月『書物展望』第九卷第五號) 2頁上「併し英佛の二學や、恐らくは露西亞學に比して、獨逸語の研究が實に幼稚なものであつたことは、幕末に於ける獨逸學書の貧弱なことによつても推察される。」

村松正俊教授「翻譯界とドイツ文學」(昭和十一年四月『書物展望』第六卷第四號) 2頁上「然るにドイツ文學の翻譯となる、その勢があまり振はないのはどうしたわけであらうか。尤も翻譯文學の振はないのはドイツ文學ばかりでなく、最も普及してゐる筈のイギリス文學でも翻譯文學として見ると案外振はない。少くともさういふ感銘を與へてゐる。一番盛であるやうに見えるのは、語學としてはそれ程廣く普及してゐないフランス文學とロシア文學とである。」2頁上「(上略) 英

語やドイツ語と違つてフランス語で原著の讀める人が比較的少く、ロシア語に於ては更に少いといふ關係上(下略)同頁下「ところで事實上一番振はないのは、やはりドイツ文學であらう(中略)これはドイツ文學の比較的豊富なのと日本に於けるドイツ語研究の深さに反比例してあまりに貧弱であると云はなければならぬであらう。」(同頁上)「ドイツ語研究の盛なのに反してその文學の翻譯の少いことは、ドイツ語を學ぶものが多く技術、醫學、音樂、哲學の方面に走つたからであらう。翻譯だけについていへば、哲學の翻譯はドイツ文獻の翻譯のうち第一を占めるであらう。」

Wörterbuch

der

japanischen Sprache.

Von
August Pfizmaier.

Erste Lieferung.

W I E N.

In Commission bei Carl Gerold und Sohn.
Gedruckt bei den P. P. Mechitharisten.
1851.

725 KAMZITSKI | *For Deeper Reading*